

第235回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」（10月）句会記録

10月11日（金）、句会が開催された新橋はまだ残暑厳しく、ビル街の日影を見つけては、選んで歩きました。街ゆく人の服装は相変わらず夏のもの、冷たいお水を買って「新橋ばるーん」に向かいました。10月投句をされた皆さんの中には、暑さのせいか、ちょっと注意力散漫ではなかったかと思えたのですが、如何でしょうか。「文語体語句」であるべきところが、「口語体語句」のままに残っていました。もう一度、涼しい夜のひとときにでも提出句を見直されるようお薦め致します。

10月の句会のご参加の皆さまは。次の通りです。

投句をご参加の皆さま

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、
原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾自然。

（15名の皆さんです）

句会に参加された方々

創風さん、一光さん、和感さん、月草さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、
多佳さん、自然。（9名）

句会当日、皆さんのが優良句として選句された句を披露し、欠席された6名の方の選句は、奥田さんが代読披露して下さいました。「さらに優秀句に磨き上げるには、どうすればよいか」など、疑問点や不明なことをディスカッションしました。これらの纏めは今月も、傘吉さんにお願い致しました。傘吉さん有難うございました。

◎『鰯雲独りのシャツを高く干す』	荻女	☆5
◎『秋の陽の障子に映る影やさし』	清助	天3☆4
◎『青蜜柑包む祖母の手皺深く』	柴楽	天2☆4
◎『角打ちでスキさかなにひとり酒』	創風	天2☆4
◎『秋出水なす術もなく坂の街』	晶如	天1☆4
◎『無花果や箱階段の祖母の家』	荻女	天1☆4
◎『凍らせた熟柿をすくふ銀の匙』	晶如	天1☆4
◎『彼岸花野辺の仏に寄り添ひて』	傘吉	天1℃3
◎『秋祭昔の顔で立ち話』	晶如	天1℃3
◎『空高し銀杏たわわ禪の寺』	蒼樹	天1℃1
◎『秋雨や向かふから来る赤き靴』	自然	天1℃1

句会のディスカッションの中で取り上げられた事項

天賞は付きませんが、荻女の句「鰯雲独りのシャツを高く干す」が、最得票賞（☆印）を獲得しました。使われた季語「鰯雲」と下五の「高く干す」が、好天の洗濯日和を表現し、読者の共感を得ました。もう一か所明確にするとすれば、「独り」か「独り身」か、句の表現が問題になりました。

次は清助さんの句「秋の陽の障子に映る影やさし」が、天賞三つを獲得しました。この句の季語は「秋の陽」です。中七に「障子に映る」と、「障子」を使われておりますが、障子は冬の季語ですから、もう一苦労必要かと思われます。次に柴楽さんの句「青蜜柑包む祖母の手皺深く」も天賞二つを獲得しました。季語は「青蜜柑」です。この祖母の手と青蜜柑との対比が、句の深みを増しました。次に創風さんの句「角打ちでスキさかなにひとり酒」も、天賞二つを獲得しました。角打ちとは、お酒屋さんの奥の一角をお客様に空け、お酒を飲ませる仕組み、肴には升の上部に少量の塩を置き、飲むお客様もいます。

この句では食べるるものでなく、芒の穂を肴にしたのでしょう。それが読者の共感を得ました。

今回の優秀句の解説は☆2つまでにします。今回は今後に参考になると思われるものを下述の資料から抜粋してみました。高柳克弘著「添削でつかむ俳句の極意」という参考書です。如何でしょうか。

ご参考

俳句が「季語の説明」と言われないために

・・・・（以前略）俳句では季語を入れることがルールになっています。「詠みたいことが制限されるのでは」と不自由に感じてしまう向きもあるでしょう。じつさいは季語は私たちの表現を大いに助けてくれます。

螢火や手首細しと掴まれし

「手首細しと掴まれし」は、「手首は細いなあ」と言って、やっとつかまれたということです。これだけだと誰が誰の手首をなにゆえにつかんだのかがわかりませんが、季語を手がかりにすると、情景が解るようになってきます。この句の季語は「螢火」です。螢と言えば和歌に

物思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ思ふ

とあるように、人の魂、とりわけ恋心の譬えとして詠まれてきました。そこで、おそらくはこの正木さんの句も、男女の恋の場面なのだろうと想像できます。

螢は初夏に見られます。また、夜になると光りながら飛び交います。水辺に現れます。こうした情報が「螢」という季語にぎゅっと詰まっています。この句をあえて小説ふうに記述するとこんな感じになるでしょう。

「夏の夜、螢見にやってきた男女。近くには川が流れていてせせらぎの音もしている。そこで男の方が愛しさのあまり「きみは手首が細いなあ」などと言って、女の手を握る。闇の中で、女の手首の白さが際立って見える。ふたりはおそらく恋愛未満の関係、あるいはういういしいカップルである」……これだけの内容を十七音で表現できるのも、「螢火」という季語の働きなのです（作者によれば、実際に句が出来たのは、居酒屋で酔った勢いに俳句仲間に無造作につかまれたという何のときめきもない現場だったそうですが）。

逆に言えば、季語はたくさんの情報が詰まっているので、それを繰り返してもあまり意味はありません。「螢」という季語の場合、句の中に「夜」とか「闇」とか「川」、あるいは「恋」などという言葉を入れても、それは読者にとって「知っている」とことなのであまり新鮮な印象を与えられないのです。・・・・（以下略）

季語の工夫

季語には「本意」といって、歴史的に積み上げられてきたイメージがあります。ひとつひとつの季語が持つ背景を確認しながら、季語を生かしていきましょう。それは同時に季語の歴史にあなたの句で一ページを加えることになります。

松尾芭蕉は弟子の杉山杉風(さんぶう)の句から季語の本意を抽出した句を下述します。杉風の句を次のように添削しました。下五の「秋の風」はまさに季語の本意です。

がつくりと身の秋や歯のぬけし跡 杉山杉風

がつくりと抜け初むる歯や秋の風 芭蕉推敲

(下五 「秋の風」 の妙)

自然まとめ